

# 発達障がい児の父親グループにおける意識の変化について

那須野 康成

愛知学泉短期大学

## About a change of the consciousness in the father group of developmental disorders children

Yasunari Nasuno

キーワード: 発達障がい developmental disorders、父親グループ father group、意識変化 change in the consciousness

### はじめに

2005年「発達障がい者支援法」の法律の施行により、にわかに広汎性発達障がい（自閉症・アスペルガー症候群など）、学習障がい（LD）、注意欠陥多動性障がい（ADHD）などが注目された。

発達障がいは「見えにくい障がい」ともいわれ、当初は早期発見、早期療育・教育支援がおくれ、子どもの二次的障がいにつながり、情緒不安定や心身症状などもあらわれ、その対応に後手に回ることにもなった。近年は、医療、福祉、教育の現場では幼児期から青年期にかけて発達障がいの具体的な支援が行われるようになって来ているが、まだ十分とは言えない。

発達障がいは、日常生活での生活習慣の確立や社会性の確立の困難さ、対人関係におけるコミュニケーションスキルの確立の困難さなどが特徴としてあげられている。

特に小学校・中学校における特別支援教育は、支援コーディネーターを中心として、個別支援計画の策定など、子どもの個々の発達や困難さの特徴にあった支援が進められている。

一方、発達障がい児を持つ保護者は、わが子の発達障がいの状況の理解や受け止め、養育方法、学校や関係機関との協力関係など、健常児に比べ、計り知れないほどの苦悩や努力が必要な場合がある。

特に急速な発達過程での乳幼児期における、保護者の発達障がいの受け止めと日常の養育における悩み、それに伴うストレスなど心身の負担が大きいほど、母子の愛着関係の形成に影響を及ぼし、場合によっては子どもの発達の二次的な障がいとなりやすい。

そのため、乳幼児期の良好な母子関係を築くには、乳幼児健診や健診後の親子への事後指導など地域の関係機関の療育支援が発達障がい児のゆるやかな発達を促すカギとなる。

### 1. 問題と目的

一般に健常児であれ、障がい児であれ、その養育の多くは、母親に偏る傾向が見られるが、子どもの健全な心身の発達に大切なことは、夫婦間における父親、母親の役割分担と夫婦間のバランスの取れたかかわりである。

特に、発達障がい児を持つ保護者の場合は、父親の子ども理解とかかわり方の理解、そして母親への育児協力や心理的なサポートが是非必要である。

筆者は、以前から発達障がいの幼児の通所型療育施設において母親グループのカウンセリングを行っているが、その中で多く語られたのは、父親の子どもに対する無理解や日頃の養育への協力が少ないことへの不満などである。

一方、父親が子どもの障がいを理解し、積極的に育児に参加し、夫婦間の役割も取れている場合は、子どもの発達も促されている傾向が見られる。

そこで、本研究では、父親支援グループを立ち上げ父親グループへの働きかけが、どのように、子ども理解、養育への協力、母親支援に繋がるか、また父親自身の意識にどのような変化をもたらすかを目的とした。

グループの対象者は、筆者が助言指導している通園型療育施設に通園している幼児の父親とし、グループ名を「パパの会」とし、利用者全員に参加を呼びかけ、チラシを配布し、また母親からの誘いも依頼した。

### (1) 通園型療育施設の概要

施設は、未就園児や保育所等に平行通園をしている就学前の幼児を対象とし、民間の社会福祉法人が運営する通所型児童デイサービスであり、定員10名の小規模施設である。

通園に至る経緯としては、保健センターにおける3歳児健診後の紹介や市の広報、親からの口コミ等である。

この通園施設は、広汎性発達障がいを主として、発達に不安や障がいの疑いのある、おおむね2歳から就学前の子どもが、保護者と一緒に通園し、集団療育を通じて、日常生活習慣の確立や運動機能を高めるあそび、仲間とのコミュニケーションの確立など生活経験を豊かにする基礎づくりを基本としている。また、保護者には、親子一緒に療育を行うことで子どもの理解、具体的なかかわり方など保護者の学びの場としている。

スタッフとして、保育士・臨床心理士が常勤で、言語療法士・作業療法士が非常勤で勤務し

ている。

### (2) 施設の日課

| 時間    | 療育内容   |
|-------|--|
| 9:30  | 登園、身支度・出席シール貼りなど                                   |
| 10:00 | たいそう・親子ふれあい遊び                                      |
| 10:10 | 朝の会（おはようの歌、あいさつ、呼名、手遊び）                            |
| 10:25 | 排せ   |
| 10:30 | 主活動（運動遊び、製作あそび、集団あそび、音楽あそび、散歩など）<br>（母子分離による親個人面談） |
| 11:00 | 自由遊び   |
| 11:30 | 帰りの会   |
| 11:45 | 降園   |

## 2. 父親グループの方法

### 1) 実施日

隔月の月一回の土曜日 10:00～11:50

### 2) 場所

療育施設のプレイルーム2部屋でおこなった。

### 3) 実施方法

母子で行っている朝の会、自由遊び、集団あそびを主に父子で行い、その療育内容を体験してもらおう。その後、父子分離を行い子どもに父親各自が一時お別れを告げ、プレイルームから別室に移動した。

グループ討論の基本は、非指示的なカウンセリングを主とするが、子どもの問題行動に対する理解の質問や、子どもの障がいについての質問に対しては施設長を交え意見交換を行なった。

また、エゴグラムテストや臨床動作法による体のリラクゼーション、職場における悩みや父親自身の性格傾向など自分自身への内的な気づきなども討論内容に取り入れた。

### (1) 父親グループに参加の幼児の年齢・性別・家族構成・障がい等の内訳

| 氏名 | 年齢 | 性 | 家族構成  | 障害の有無    |
|----|----|---|-------|----------|
| A  | 6  | 男 | 両親    | 広汎性発達障がい |
| B  | 6  | 男 | 両親・姉弟 | 広汎性発達障がい |
| C  | 5  | 男 | 両親・兄妹 | 広汎性発達障がい |

|   |   |   |       |          |
|---|---|---|-------|----------|
| D | 5 | 男 | 両親・妹  | 広汎性発達障がい |
| E | 5 | 男 | 両親    | 自閉症      |
| F | 5 | 男 | 両親・弟妹 | 自閉症      |
| G | 3 | 男 | 両親    | 未受診      |
| H | 3 | 女 | 両親    | 広汎性発達障がい |
| I | 3 | 男 | 両親    | 未受診      |

### (2) 父親グループの流れ

| 時間    | 内容                      |
|-------|-------------------------|
| 10:00 | 登園                      |
| 10:05 | たいそう・親子ふれあい遊び           |
| 10:15 | 朝の会（おはようの歌、あいさつ、呼名、手遊び） |
| 10:30 | 排せ                      |
| 10:35 | 子ども・母親は自由遊び             |
| 10:35 | 父親は別室にてグループ討論           |
| 11:45 | 帰りの会                    |

### (3) 父親グループの年度別内容

#### 2009年度

|    |                 |
|----|-----------------|
| 1回 | 発達障がいについての講和と討論 |
| 2回 | 自由討論            |
| 3回 | 自由討論およびストレステスト  |
| 4回 | 自由討論及び育児相談      |
| 5回 | 新年会及び交流会（冬の交流会） |
| 6回 | 自由討論            |

#### 2010年度

|    |                 |
|----|-----------------|
| 1回 | 自由討論            |
| 2回 | 夕べのつどい（夏の交流会）   |
| 3回 | 自由討論            |
| 4回 | 親子粘土あそび         |
| 5回 | 臨床動作法実技         |
| 6回 | 新年会及び交流会（冬の交流会） |

#### 2011年度

|    |                 |
|----|-----------------|
| 1回 | ミニ運動会           |
| 2回 | 自由討論            |
| 3回 | 夕べのつどい（夏の交流会）   |
| 4回 | 自由討論            |
| 5回 | 新年会及び交流会（冬の交流会） |
| 6回 | 自由討論・質問紙調査      |

### (4) 実際の参加状況

事前に参加者を把握し実施したが、仕事の都合で、欠席を余儀なくされる参加者もあり、常時5～6人の参加であった。

### 3. アンケート調査

2011年度の最終回に父親グループにおける意識の変化をみるためにアンケート調査を行った。

1) 実施日 2011年度末日

2) 回答者数：9名

3) 結果（回答は実数で表示）

問1「園の療育内容の理解」

- ・よく理解できた 4名
- ・ある程度理解できた 4名
- ・あまり出来ていない 1名

問2「子どもの理解」

- ・よく理解できた 3名
- ・ある程度理解できた 6名

問3「奥さんの大変さの理解」

- ・よく理解できた 8名
- ・ある程度理解できた 1名

問4「家庭での育児参加の変化」

- ・よく参加する 2名
- ・ある程度参加する 5名
- ・あまり参加できない 2名

問5「子どもとの遊び」

- ・多くなった 3名
- ・ある程度多くなった 3名
- ・変わらない 3名

問6「夫婦間の会話」

- ・多くなった 4名
- ・ある程度多くなった 4名
- ・変わらない 1名

問7「父親自身の変化」

- ・変化があった 4名
- ・ある程度変化があった 4名
- ・変わらない 1名

問8 自由記述の内容

・育児について貴重な意見が聞けてとても参考になった。

・通常行っている療育の内容が体験できとて

もよかった。

- ・休日はゆっくりやすみたいので時々に参加しかできないが、参加して良かった。
- ・家と外での子どもの様子のちがいに気づくことができ、子どものストレスも理解できた、また親同士の心境も共有できて良かった。
- ・少しずつ進歩していると思った。
- ・仕事上休みがないのでこうゆう会もよい。
- ・集団での子どもの様子が見られてよかった。

### (1) 結果

問1から問7すべての項目に父親の意識や態度に変化が見られた。

園での療育内容の理解では、実際に施設における療育内容と同じ内容で父子に参加してもらった点が結果に結びついている。子どもへの理解では、自由討論での発障がいの知識なども話され、またお互いに具体的に意見交換する中で子どもの障がいに対する理解が進んだ。

家庭における母親の大変さの理解、育児参加、子どもとの遊び、夫婦間の会話では、グループ討論内で、あえて話題として取り上げることもあり、意見交換する中で父親自身の問題として考えることが出来た。父親自身の意識変化では、臨床動作法、ストレステスト、エゴグラムテストを取り入れることで、自己の振り返りや討論での話し合いの材料となり、結果として内的な意識変化に結びついた。

この父親グループへの働きかけによって、父親の家庭内における養育機能が良い方向に向かっている結果となった。

### (2) 事例にみる父親の変化

#### 事例1 A君(6歳)の父親

アンケート結果からは、すべてにおいて1に回答しておりその変化が顕著であった。父親の具体的内容の記述として、「パパの会に参加し、夫婦の会話もふえ、私自身も考えに変化があり、子育てを妻の責任にせず、夫婦でやっていくものだと考えるようになった。」また会に参加した感想として、「平日行っている療育を体験でき、ふだん家では見られない子どもの様子が見られよかった。そして、会に参加することが楽しみになり、他のお父さんとの交流がさらに深まる

ことが期待できた」と述べている。

会への参加回数も多く、グループでの発言も積極的な面が見られた。A君は2010年に小学校の普通クラスに就学し、その後も卒園児として家族で参加し、就学後の様子や家族のかかわり方などを話すことで、就学前の子どもを持つ親にとっては良きモデルとなった。

#### 事例2 C君(5歳)の父親

アンケートでは、療育施設の内容、妻の養育の大変さによく理解できたとしている。また、子どもの理解、育児参加、遊びについてはある程度理解できたとの評価をしている。自由記述では、家と外での子どもの様子の違いがわかり、子ども自身が抱えているストレスに理解が持てるようになったと述べている。そして、同じ子どもを持つ親同士の思いが共有できてよかったとしている。

#### 事例3 B君(6歳)の父親

他の父親に比べ不安傾向の高い父親であり、子どもの障がいの様子、対人関係、就学先など多くの質問があった。それだけに会への参加も積極的であり、父子のみで参加することも多かった。アンケート結果からも療育内容、子どもの理解、妻の大変さ、育児参加、遊びに1、2の評価がありその変化が見られた。自身の意識変化もあり、具体的に参加し、話すことで不安の軽減にも役立った。B君も2010年から小学校の普通学級に就学し、その後も会には家族で参加している。

#### 事例4 G君(3歳)の父親

アンケート結果では、よく理解できた、理解できたに回答している。問7の具体的内容として「よそのパパさんも頑張ってみるんだなと思った。自分だけじゃないという孤独感がなくなった」と回答している。一方、「休日はゆっくり休みたいので時々参加したい」との自身の時間の使い方にも言及おり、多忙な年齢の父親の様子もうかがえた。

#### 事例5 Hちゃん(3歳)の父親

グループ中では、唯一の女の子の父親である。

最初のころから、かわいいなどの発言が多かったが、障がいの受け止め、子どもの理解、かかわり方についてはわからないと悩んでいた。会に通い親子での遊び、家族間の交流、グループ討論を重ねることで、父親自身にも変化が見られるようになった。

特に、我が子の障がいの受け止め、かかわり方、親子遊びなどは1年目の後半から積極的な面が見られ、懇親会や新年会ではムードメーカー的存在となり楽しい雰囲気作りで盛り上がることもあった。質問紙では夫婦の会話、意識の変化に1を付けており、実際母親からも変化を認める発言も多かった。

#### 4. 考察

3年間で17回の父親グループを実践し、結果はグループを体験したことによる父親の意識変化に、その効果が見られた。

筆者は以前不登校の父親グループを企画し実践したが、意見交換も少なく場の雰囲気も暗く緊張感が漂い精神的に疲れた経験がある。

その経験から、筆者はグループ立ち上げ前に、グループ討論の方法として ①発達障がいの理解 ②療育施設の目的と内容の理解 ③家以外での子どもの動きの理解 ④夫婦間の協力関係のあり方 ⑤構成された遊びの中での父子の触れ合いを枠組みとして取り入れることを考えた。

初期のころ、グループ討論では、やはり意見交換や自主的な発言が少なく、実際参加者の中には、寡黙で人前で話すことが苦手の父親もいた。そのため、その都度討論の進め方に工夫を要した。

そこで、討論以外の方法として、懇親会や新年会など家族間の交流と親睦行事などを取り入れた。その結果、家族間で相互交流による緊張感の緩和や相互理解による安心感も生まれ、その後のグループ討論では多くの意見交換が見られるようになった。

一方、グループ参加の効果として療育施設を卒園した家族も継続して参加する様子が見られ、この会が卒園後の身近な相談支援の場所となった。また、卒園した家族が参加することで現在通園している家族にとっては、子どもの将来へ

の見通しや具体的な処遇を考える材料として参考になった。

この経験から、父親グループを実施する場合は、参加者の状況を把握し、時には企画者が父親同士や家族同士の交流の橋渡しをして、緊張感や不安感を軽減させる役割を持つことも必要であると感じた。

父親グループを立ち上げて、3年目が経過し、現在、会の名称は「パパの会」から「ファミリー交流会」と名称が変更となっている。変更理由としては、母親たちから父親だけのグループには消極的な人もいるので、家族が交流する内容で参加し、その中に父親グループの会がある方がよいとの意見があり名称変更をした。会の名称も保護者にとっては大切な要因であることが分かった。

今後の課題として、通園型施設は、子どもの状況に応じて卒園と入園が時期に関係なく順次あるため、会を継続させるためには、新規の家族（父親）が主体的に参加して、以後継続参加しやすくなるかである。それには、家族の事前の状況把握や会の内容と運営方法の工夫が必要である。

#### 参考文献

発達障害の早期発見、早期支援ガイドブック  
日本発達障害ネットワーク編・発行（2007年）